

# 種山ヶ原は今④⑦

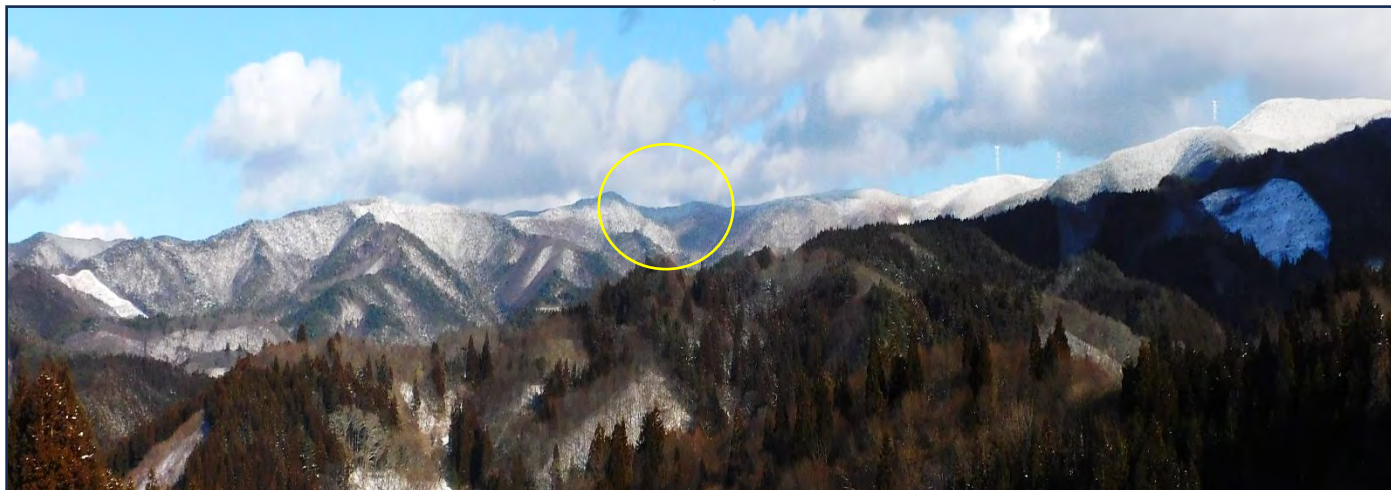
## 「大森山と物見山」

雪に覆われ、今年は水不足で悩むことはないと思う。2月末には山に入ろうと思う。野草の愛好者が多いので、今年は道端の草花を大切に、その奥の草刈りをしようと考えている。草刈りの方法をみんなで検討し、共通確認をしっかりとやろう！

長年の課題「種山ヶ原から五輪峠までのコース」を今年こそ取り組まねばならない。

黄色○が五輪峠付近

大森山



左側の「大森山」は「物見山」より少し高く見えますが、物見山の方が870mで50m程高いんです。左は大森山から五輪峠までの山並です。途中に五輪峠があり、現在三代目と思われます「五輪の塔」は県道造成のために少し移動して建っています。私(82才)が知っている70年前の五輪の塔は土手の下に倒れていました。あれは多分二代目だと思います。

「どうしてこんなに丸い石がここにあるんだろう？」ととても不思議に思ったことを今だに覚えています。」

〈物見山頂上 後ろがアメダス〉

大森山

物見山



頂上に小さく立っているのがアメダス





さて、人首丸がなぜ大森山を陣地にしたのかはいまだに謎だが、おそらく胆沢平野から北上山地を眺めた時、大森山の秀麗な姿に惹かれたからだと思うのですが？。ここに立てこもり朝廷側と戦った若き闘将「人首丸」。人首丸に囚んだものとして「人首川」「人首町」「人首小学校」等がある。苗字にも「人首」がある。

「なぜ物見山？」名付け親は、敵の朝廷側坂上田村麻呂の娘婿田村兼光で、人首丸陣を攻略するための陣の一つにしたからだと思います？確かに眺めがいい。子どもの頃、物見山から海が見えるというので、海を見に良く登ったものです。しかし、未だに見たことがありません。ある時、ある老人から「種山で星が見たい」と頼まれ、連れて行ったことがある。西には胆沢平野の灯が見え、とてもきれいだ。そんな時、大きな黒い飛行機のようなものが音もなく南の方に飛んで行った。あれは一体何だったのだろうか？いまだに不思議だ。気づいたのは二人だけだった。

## 宮沢賢治と沢辺琢磨

(本名 数馬・坂本龍馬の従兄弟)

二人はともに時代はかなり異なりますが、イーハトーヴ風景地五輪峠を越えて人首を訪れています。

沢辺琢磨は、明治元年(1868)ハリストス正教普及のために函館～大間崎～三陸沿岸～遠野～五輪峠～人首そして江戸へ向かっていましたが、気仙沼で捕縛され人首番所に。その54年後大正13年(1922)宮沢賢治も五輪峠を越えて人首を訪れています。

二人とも出会うことはなかったのですが、沢辺琢磨は明治8年(1875)日本人初めての司祭になり、明治26年(1893)には東北巡教に人首を訪れ、人首の町は花火を打ち上げ大歓迎したそうです。また、沢辺琢磨の死後3年大正5年(1916)宮沢賢治は父との宗教に関わる争いで家出同様の2度目の上京し、沢辺が司祭をしたニコライ堂を訪れ短歌を3句詠んでいます。

「霧雨のニコライ堂の屋根ばかり

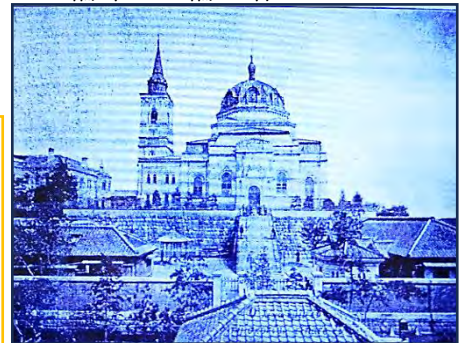
なつかしきものはまたとあらざり」

賢治はこの頃から短歌から詩作に、また童話等の作品作りに没頭し、秋の帰郷の時はトランクいっぱいの童話の原稿を持ち帰ったといわれています。これらの原稿が後の宮沢賢治作品として人々に愛されたのです。

澤部が護送されてきた番所の上には明治23年人首カトリック教会が建ち、38年にはフランス製のアンジェラスの鐘が設置されましたが、老朽化で現在は取り壊されたものの、今もなお地区民の協力で「アンジェラスの鐘」だけは残され、夕方5時に小さな田舎町に流れています。賢治も、人首を訪れた時、ハリストス教会の鐘とカトリック教会の「アンジェラスの鐘」の音を聴いたと思います。



五輪峠の五輪の塔



初代ニコライ堂



2代目ニコライ堂



明治 23 年に完成。昭和 8 年  
大火で焼失。その後再建され  
たが、焼失。＜人首ハリストス正教会＞

明治 17 年設立。明治 37 年にはフランス製の「アンジェラスの鐘」  
が設置された。＜人首カトリック教会＞

＜戦前＞

＜戦後＞



＜アンジェラスの鐘整備を祝う式典＞

3 人のシスターの常駐を最後に老朽化で取り壊されたが、「アンジェラスの鐘」は残して頂いた。





## 「やまなし」と種山ヶ原(1)

宮沢賢治作「やまなし」が「岩手毎日新聞」に掲載されたのは大正12年4月8日。生前に発表された作品は少なく、貴重な作品の一つです。この作品の舞台は種山ヶ原というわけではありませんが、「星座の森」に行く途中に架かる小川の橋を渡る時、この「やまなし」をよく思い出します。イワナもよくこの橋の下でゆったりと泳いでいるのです。イワナを釣ったこともあります。釣り上げると3日もすると別の主が現れます。正に生き物の世界がそこにはあります。

物見山を分水嶺の頂点として、湧き水は気仙川、小本川、北上川に流れていきます。種山ヶ原のキャンプ場付近では2m程の川幅となり、山間を流れる正に溪流です。そこには溪流の王様と言われる「イワナ」や沢蟹がおり、それらを狙う「カワセミ」「やませみ」が色鮮やかな姿で溪流に彩を添えています。

川の近くでは、春になるとやまなしや木いちごの白い花が咲き、初夏には赤い実がなり、秋深くなるとやまなしがたわわに実をつけます。しかし、やまなしは霜が降りてからでないと食べられないと言いますが、霜が降りても渋い。熊たちはさすがです。匂いで熟したことが分かるらしく、一夜のうちにきれいに食べていきます。熊たちが食べた後の木に近づくと、甘い香りでいっぱいです。食べこぼしを食べてみるととても甘いです。種山ヶ原には10本以上のやまなしの木がありますが、去年は暑さのために夏のうちに実が落ち、2粒しか見ていません。熊にとっては受難の年でした。山ぶどうの実もあまり見るのがなく、クマ騒動の原因の一つです。



やまなしの花



ヤマナシの実



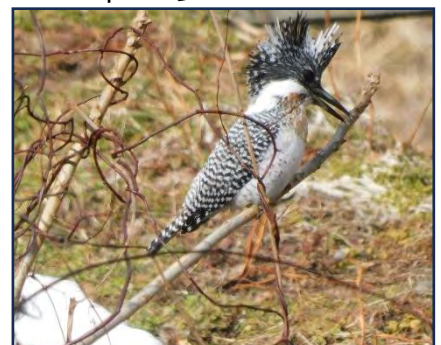
木いちご



子連れ熊



熊いちご



ヤマセミ